平成24年度技術第二次試験（口頭試験）再現記録

１　氏　　名　　うぐい
２　年　　齢　　４１歳
３　職　　種　　地方公務員
４　日　　時　　平成24年12月5日（水）10:30～11:15
５　場　　所　　フォーラムエイト7階779号室
　　（東京都渋谷区道玄坂2-10-7新大宗ビル1号館）
６　技術部門　　農業部門（選択科目：農業及び蚕糸　専門項目：作物）
７　内　　容

＜試験開始まで＞

9：20　渋谷駅到着。道玄坂の途中でタバコを吸える場所を見つけ、缶コーヒーを飲みながら経歴、体験論文をイメージする。落ち着ける場所だったのでしばらく座っている。

10：00　フォーラムエイトに到着。受付を済ませ、控室に入る。経歴、体験論文を取り出し、眺めながら話す内容を再度イメージする。時間が近づくにつれ、緊張してくる。深呼吸をして落ち着く努力をする。

10：24　指定された部屋の前の椅子に着席する。中から話し声が聞こえる。内容は聞き取れず、前の受験者の試験かと思っていた。

10：30　時間通りにドアが空き、「どうぞ」と案内される。入室する。受験者はおらず、先程の話し声は打合せだったのだとわかる。受験番号、氏名を告げ、挨拶をすると、着席を促され、着席する。向かって左側の試験官はかなりご年配の方で、右側の試験官は60歳よりは若い方と思われた。

＜口答試験＞

Q.　まず最初に経歴について簡単に説明してください。

A.　2分程度で説明する。ざっくりと話しつつ、普及センターでの業務経歴では業務内容が段階的にレベルアップしたことを説明した。

Q.　それでは、体験論文について10分以内で説明してください。

A.　8分とばかり思っていたので面食らったが、少し丁寧に説明しようと思い話し始める。すると、試験官が手元に置いている体験論文が見え、目線が先に先に移るのが見えたので、無理に時間をかけることはせず、当初のイメージ通りに話を進める。おそらく6～7分で説明を終える。

＜説明後の質疑応答＞

（そのほとんどが、経歴および体験論文に関するものであった。技術士に関する質問は最後の 2～3 分間のみであった。終始和やかな雰囲気で、思ったより緊張せずに受け答えすることができた。経歴、体験論文に関する質問は、ランダムに聞かれた。質問は、最初は左の試験官が中心で、後半は右の試験官に移った。）

（左が主体で質問）

Q.　農大の農業経営研究科では、学生指導はマンツーマンなのか。

A.　1 学年の定員が 10 名で、1 職員につき学生が 2 名程度で、マンツーマンに近い。

Q.　経歴では、普及センターで〇〇町の水稲の技術指導の業務歴が長いが、〇〇町における水稲の位置付けは。

A.　水田転作が進み、畑作物、園芸作物との複合経営の中で、相対的に水稲の割合が低下している。

Q.　水稲の他の作付品目は。

A.　□□農業の縮図とよばれるように、畜産、畑作および園芸作物があり、畑作物では、作物１，２，３，４，５が作付けられている。

Q.　大学院では、農業工学を専攻しているが、普及指導員に採用されて水稲という作物が専門になったことでの苦労は。

A.　大学院では酪農の搾乳施設の廃液処理が研究テーマであったので、作物が専門になることは予想していなかった。農業者に早く信頼してもらえるよう勉強したことは大変だった。

Q.　体験論文の中で、「水稲の大作り」とあるが、これはどういうことか。

A.　総籾数が多いことを表現した。（試験官は納得していない様子）農業者が当時目指していた茎数の多い大株を、大作りしていると表している。（納得した様子）

Q.　籾数が多いとどうして収量・品質が低下するのか（収量と品質を別々に質問）。

A.　登熟歩合が低くなり、青未熟粒の割合が多くなり、収量、品質が低下する。

Q.　それは、無効茎が多いということだね。

A.　その通りで、出穂が短期間で揃わないことに起因する。

Q.　ところで、登熟歩合に加え、千粒重も大切だと思うが、収量構成要素と収量についての考え方について説明してください。

A.　収量構成要素は、株数、一株あたり穂数、一穂あたり粒数、登熟歩合、千粒重で、その掛け算の結果が収量である。（体験論文の業務では、気象が不安定の地帯であるため登熟歩合が不安定で、中間の目標として粒数を重視したことを説明したかったが、収量構成要素の説明と合わせてしようとしたため何を言いたいのか分からなくなる。訳が分からなくなりすみませんと発言する。）

Q.　水稲の品質として、体験論文にあるタンパク値〇%はちょっと高すぎるのでは。目

標としては△%程度ではないか。

A.　おっしゃる通りで、□□における高品質米の基準は▲%である。しかし、当時の現状はかなり高い値であり、〇%以上で生産者手取りからマイナス〇円のペナルティーが科されたことから、〇%を下回ることを目標とした。

Q.　現在の〇〇町の状況はどうなっているか。

A.　品質向上の取組みは継続されており、今年度産の水稲は高品質米の基準タンパク値▲%を出荷総数の半数以上がクリアしたと聞いている。

（右が主体で質問）

Q.　農大の農業経営研究科では耕畜連携に取り組んでいる。このような課題では農業試験場との連携が有効であるが、連携はあったか。

A.　視察で話を伺うという形でしか関わりがなかったが、連携の有効性についてはおっしゃる通りで、今後は連携を考慮して業務を行っていきたい。

Q.　〇〇町の水稲の課題では、要因は多肥であるように思える。農業生産においては、10 年位前から施肥量は少なくする方向性で進んできたが、〇〇町ではずっと多肥の作り方だったのか。

A.　収量を多肥によって確保しようとしていた。

Q.　今後は試験場から発表されたツールを用いて要因解析を効率的に進めたいとあるが、このようなツールは各試験場で出されているが正しい実態が分からないと意味がない。実態の把握はどのように行うのか。

A.　JA では、各生産者の栽培履歴を出荷時に提出させている。栽培履歴には実態が詳細に記載されており、JA と協同で業務を行うことで実態をツールに落とし込める。

Q.　大学院で学んだことと異なる専門で苦労されたかと思うが、そこで成長できたか？農業者の反応はどのくらいの年数で変わったか？

A.　職場の先輩、農業者に教えてもらいながら成長できた。農業者の反応は 3～4 年目に変わった。

Q.　実証展示ほでは、言い方は悪いがズボラな管理のほ場との差はでたか？

A.　あった。低温寡照傾向の年の成熟期に、管理が悪いほ場では、明らかに登熟歩合が悪く、稲が青いままであった。

Q.　そういう差が見えたことで、農業者は熱心になったか？

A.　なった。技術指導の面談では、目が真剣であった。

（左が発言する）

Q.　稲作りの狙いは、高品質か、高収量か、あるいは両方か？

A.　品質重視である。

Q.　□□の主力品種は？

A.　「品種名１」が主力であり、近年は「品種名２」を推進している。他に「品種名３」、「品種名４」、「品種名５」などである。

Q.　○○町と□□の主産地の△△地方の違いは何か？

A.　気象条件が異なる。○○町は太平洋に近く偏東風の影響を受ける。そのため、作況の収量に 150kg もの差が出てしまう。

Q.　稲作に厳しい地域なんだね。主産地で業務を行った方が技術力の向上が図れると思わなかったか？

A.　稲作に厳しい地域では、温暖な地域ではやらなくてもいいような技術も積極的に実施しなければいいものがとれない。そのため、主産地でなくても技術力は身に着けられると思って仕事をしてきた。

Q.　勤務していた普及センターのある「◎◎町」は湿地か？

A.　おっしゃる通りで、泥炭の上に火山灰がのったほ場が多い。

（右より、そろそろ時間ですと促され、左より質問）

Q.　なぜ、技術士を目指したか？

A.　より公益性の高い業務を行なえる技術者になりたいと思った。また、まわりの先輩に技術士となる方が複数おり、自分も自己研鑽していきたいと思い、技術士を目指した。

Q.　技術士に求められる資質は？

A.　（反射的に、3 義務 2 責務について自分の言葉で回答してしまう。試験後、基本的要件について説明するのだったと反省。）

Q.　最後に資質向上が出てきたが、あなたは CPD についてどう取り組むか？

A.　現在、□□農業普及学会、□□水稲懇話会に加入しているが、それに加え作物学会等に加入したいと考えている。また、技術士会において、普及指導員以外の技術士の先輩から情報を得て、研鑽に努めたい。

（左）　これで質問を終わります。

（自分）挨拶し席を立つ。

（左）　あ、聞き忘れてた。年齢は？

（自分）41 歳です。

（左）　はい、分かりました。おつかれさまでした。

＜補足＞

（質疑応答に詳細を書ききれなかったが、実際の応答では、さらに頻繁なやりとりがあった。体験論文の課題の背景について事前に試験官が仮説を立てていて、それについて確認しているように感じた。質問は「～は～と思うが」と前置きがあることが多く、回答に対しては「うんうん」と頷きながら試験を進めていた。）